Hallo wee(ke)n(d)

トマトしるこ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一話限りのちょいとしたハロウィーンの話。

の！　筈でしたがぁ！（ホアアアアアア!!）

アイデアや没案があるので！

短編集として続行します！（モウイヤー…？）

という私のドルフロ短編集。多分４０４中心。

目次

Ｈａｌｌｏ ｗｅｅ（ｋｅ）ｎ（ｄ） —— 1
女の価値は胸じゃないけどステータスなのは確か —— 11
行き過ぎですって４１６さん —— 22
ＡＲ—１５「生きてるって素晴らしいわ」 —— 34

Ｈａｌｌｏ　ｗｅｅ（ｋｅ）ｎ（ｄ）

「トリックオアトリート！」

グリフィンＳ０９地区担当指揮官の司令部、今日は、というよりもイベントがあればかこつけて騒ぐのが、ここのやり方だ。

だ、だよ。最初はらしいって自分でも思ってたというのに、今では私達まで染まってしまった。どれもこれも、指揮官が悪いのだ。まったく困った人間である。

余所とは全く違った雰囲気のここは、とても居心地がいい。任務で遠く離れた場所にいても、弾薬も心もとなくて、絶望的な状況でも……だからこそ、指揮官との温かな思い出が奮い立たせてくれるのだ。この人の為なら、気の進まない任務でも前向きになれるし、やり甲斐もあるというもの。

何と言っても――

「Ｇ１１が、やる気に、なってる？」

「へへ……ちゃんと盛り上げたら指揮官がその分だけお休みくれるもんね…」

――寝る為に盛り上げ役を買って出るＧ１１と、自主的に活動するＧ１１を見ては青ざめるＨＫ４１６のやり取りは、見ていて飽きない。

包帯でぐるぐる巻きにされた挙句、棺桶を背負ってお菓子を強請るキラキラした表情のＧ１１は笑えるし、後ずさるＨＫ４１６の表情がガラスの仮面みたいでこれまた笑える。更に面白いのが、回数を重ねるたびにふざけ具合が増していくのが、もう、ね？　察して？　指揮官の出身国ではメジャーなオハナミの時は傑作だった。

おなかを抱えて笑いたい衝動をぐっとこらえて、ポケットに忍ばせておいたカメラを構えてシャッターを切る。パシャリと音が出るが、ファインダーに収めていた二人は気づいた様子が無い。おっかなびっくりといった様子のＨＫ４１６を普段の仕返しとばかりに弄り倒すＧ１１、積極性に磨きがかかって更に精神を削られとうとう心配し始めるＨＫ４１６をどう我慢しろというのか。

「あはははは!!」
「４５！　笑ってる場合じゃないわよ！　非常事態よ！　ひ、じょ、う、じ、た、い！」
「ええ、そう？」
　作戦中に負けず劣らずの剣幕に、私も少し後ずさる。私が知らないだけで実はいつもと違うのかも…。話くらいは聞かないとね、小隊長だし。
「Ｇ１１が…かれこれ１５分も寝たいと口にしてないの……ああ、ごめんなさい。いつも私が無理矢理起こしては引きずり回してるから、とうとう可笑しくなっちゃったのね…」
「ぶはっ！」
　はい、無理ー。あわあわとする口に手を添えて落ち着かないＨＫ４１６は、普段の彼女を知ってるからこそ面白い。
「ねーねー。個室のクローゼットに隠してる飴ちょうだいー。上から三段目の左端にある飴ちょうだいー。下着でこっそり隠してる飴ちょうだいー」
「ひいいぃぃ！　へそくりの場所まで知ってるなんて…！　帰ってきて！　いつもの貴女はどこに行ったの!?」
　Ｇ１１はああ見えても鋭い。当然、わざとＨＫ４１６を困らせている。困っている側は至って真面目。
　みんなに楽しんでもらいたい、普段真面目に働いて支えてくれている子も今日ぐらいは肩の力を抜いてほしい、というのが指揮官の趣旨で、ああやって盛り上げてくれた子には配給のお菓子や嗜好品を融通してくれるのだ。欲しいものがある人形は真面目にやんちゃするわけで、そういう人形は大抵盛り上げるのが上手なので、遠巻きに見るだけの人形も巻き込まれて結果毎度成功に終わる。
　さらに、頑張った中から指揮官が良いと思った人形はプラスアルファが貰える事になっているのだ。判断基準とどうやって全員の仮装諸々を見ているのかは教えてもらえないけど、ぐうの音も出ない程正確に評価してるので文句も沸かないという徹底ぶり。以前さぼったＧ１１が権利を主張すると、翌日から一週間ほど馬車馬の様に働か

されて以来、イベントでは心を入れ替えたように打ち込んでいる。
　評価の有力説としては、大人しい系、クール系、恥ずかしがりを如何に引きずり込めたか説。Ｍ４Ａ１とか、ＡＲ―１５とか、ＷＡ２０００とか、ウェルロッドＭｋⅡとか。Ｇ１１にとってＨＫ４１６は格好のポイントゲッターでしかない。小隊の仲間をどんな目で見ているのか気にならないことも無いが、面白いので良し。
　要するにＧ１１は寝たいが為に、ああやって頑張っているわけである。
「というか、なんでそんなこと知ってるのかしら!?」
「ＨＫ４１６の事なら、何でも」
「Ｇ１１…」
「――――ッ!!」
　きり、と効果音が付きそうなキメ顔でなぜかきゅんときたＨＫ４１６は頬を染めている。こっちは呼吸すら苦しいんだけど…。
　立ってることも出来なくなって壁に身体を預けながらへたり込んだ、私の視界に見慣れた栗色が移る。右目に縦の傷が入った人形は、私の顔を見て満面の笑みで親指を立てて見せた。
　―９！　よくやったわ！
　―でしょ！　もっと褒めてもいいよ４５姉！
　でも、同僚の部屋に忍び込んでクローゼットの下着を漁るのは、お姉ちゃん感心しないなぁ…。
　しかし、これで終わる妹でもないのは私がよく知っている。こんなものは序の口でしかないのだろう。９、恐ろしい子！
「お、やってんなぁ」
「あ、指揮官」
　引き攣るおなかを何とか沈めて声がした方を見ると、指揮官がしゃがんで私を見ていた。東洋系の指揮官はいつも二ホンのヨーカイ仮装をチョイスしていたけど、今年は珍しくフランケンシュタインらしい。デカい螺子がてっぺんから生えている。
「それ、頭の横じゃないっけ」
「仮装だからな、面白けりゃいいのさ」

楽しむこと、幸せであることを大事にする指揮官。形式よりも中身を重んじる彼らしい姿だった。ついついにへらと笑ってしまう。
「４５は…吸血鬼か」
「そうだよー。９とお揃い」
「がお、可愛い？」
「可愛いぞー。でも吸血鬼ってがおーって言うかな」
「面白ければいいんでしょ？」
「違いない」
いつの間にか隣に来ていた９と揃ってゴツゴツとした手が髪を乱す。男性らしさを感じる反面、手荒な感じは全くなくて、とても幸せな気分になれるのだ。私も妹もこの時間が大好き。
もっと触れてほしい、何ならずっとくっついていたい。だから私も頑張るわけで。
「しきかーん、トリックオアトリート」
「む、お前ら二人の悪戯は俺のメンタルをごっそり削っていくからな。ここはお菓子で我慢してくれや」
「むー、指揮官から見た私達はどうなってるの」
「……意図的に台所を荒らすかまってちゃん？　わざとドッグフードを床に散らして尻尾振って待機してるイメージ」
「いやぁ、それほどでも！」
「９、褒められてないよ」
今のは〝尻尾振ってる〟だけに反応したんだろうなぁ。しかし、悲しいかな。今の私達はどう見てもそんな風にしか見えない自覚がある。二人して指揮官が秘蔵していたクッキーをつまみ食いしたり、ヘリアントスから譲ってもらったウィスキーを空けたり。かまってちゃんという表現は適格だ。
割と真剣な表情でポケットやベルトのポーチを漁る指揮官。その様子が落ち着いたものから次第に慌てたものに変わっていって、しまいにはさっきのＨＫ４１６の様に青ざめていく。
サーっという音が聞こえそうな顔でこう言った。
「すまん、無い。配り切っちまった」

きっと今私達に尻尾が在ったらピタリと止まって、へにゃっと地面に垂れていただろう。
それぐらい凹んだ。指揮官がどこからか調達してきたお菓子は配給品と違って美味しい。ハロウィーンに限らず、イベントにちなんだお菓子を作っては振舞ってくれるので、人形の間でひそかな楽しみの一つであったりする。時には取り合いになり、武器を握った人形までいるとかいないとか。
兎も角、指揮官の目に見えて凹んでしまった。
「う、うぅ…」
「な、泣くなよ9！　ちょーっと待ってたら部屋から持ってきてやるから！」
「だって、指揮官のお菓子おいしくて好きだし、楽しみにしてたから……ぐすん」
「そんなぁ……指揮官のことずっと待ってたのに…」
「45まで…。わ、悪かったって……ちょっと待ってろ、直ぐに持ってくるからさ、な？」
べそかいて俯く9と私、慌ててフォローする指揮官。揃って床を見る妹の口がにやりと三日月に歪んだのを見て察した、やはり姉妹、考えることは一緒か
お菓子は強請ればあとでくれるのだ。というか用意し過ぎる癖があるので、少しばかり余るという方が正しいか。今貰えないのは残念だが、我慢すれば食べられないものではない。それよりも、降って湧いたこの状況を有効活用しなければ。これは敵司令部を攻め落とす千載一遇の好機。
「トリックだね、9」
「うん、トリックだよね、45姉」
「え、あ、おおお！」
にいい、とつけた牙を見せつけるように微笑んで指揮官にしがみつく。人形と比較しても遜色ない身体能力を持つ指揮官も、今は流石に避けられなかったようだ。もちろん、私としても成功してもらわなきゃ困る。

しゃがみ込んでいた指揮官を私は右腕を、９は左腕を両腕で抱きしめるようにして押し倒す。ここぞとばかりに人形の力を発揮して、両足も使って、何があっても離さない姿勢で見上げる。
慌てた指揮官は左右の私達を交互に見ては言葉にならないうめきをあげている。
「しきかーん、お菓子、無いんだよね？」
「な、無い…」
「トリックオアトリートだから……お菓子がないなら、悪戯だよね？」
「へ、部屋にはある！」
「手元に無いなら同じでしょ？　でも、ホントに持ってないのかなー？」
「お、おい…」
締める腕の力はそのままに、右手を自由にしてベルトのポーチをまさぐる。手の感覚からして……ペン、手帳、ジッポライター、タバコが二つ、口直しのガム、くらいかな。ポーチには確かに入って無さそうだ。
ポーチには。
「９、そっちのポケット探ってみて。あと、シャツも」
「オッケー！」
９は左腕で、私は右腕でシャツをまさぐっていく。ポケットのある胸あたりを、指を立てて撫でるように、手のひらを押し付けて硬さを味わうように。今の状況を意識し始めた指揮官は顔がどんどん真っ赤に染まっていって、慌てぶりが増していくのが実に可愛い。この、普段の凛々しさとのギャップがいい。
「４５姉、そっちはどう？」
「こっちは、無いかも」
「ほおほほほら、だから言ったろ無いって。だから離れようか、うん」
「うーーん。でも、ズボンに隠したりとか、してないよね？」
さらに踏み込もうとする９に内心びっくりする。アイコンタクト開始。
―え、いっちゃう？　そこいっちゃうの？

―いやー攻め時かなーって。一〇〇式が居ない今がチャンスだよ
―それは…言えてるかも。うん。
指揮官と一番付き合いの長い副官が珍しく傍をはなれているのだ。これを活かさないわけにはいかない。千載どころじゃない、万載だよこれは。
心臓のオプションパーツが緊張状態を汲み取ってその鼓動を早める。どうか指揮官にはバレませんように、ていうか指揮官も凄い速さで脈打ってるね、これなら大丈夫。安心してこの手を胸からポケットに忍び込ませて――
「だあああ！　止めんかい！　降参降参！　悪戯でいいから一旦離れて――！」
「え、いいの悪戯で？」
「どうする４５姉？　処す？　処す？」
「ああ言えばこう言う姉妹だなおい！　誰だよ育てたのは！　俺だよチクショウ！」
やけっぱちになった指揮官を再度ぐっと両腕で固定する。ここまですれば人外の指揮官と言えども一人では抜け出せまい。肩に添える手に力を込めて、少しばかり手前にずらして首筋の肌を晒す。両側から同じように肌面積を広げられたことで、鎖骨が丸見えだ。
舌なめずりをして、ゆっくりと口を開く。
「４１６ー!!　Ｇ１１ー!!　助けてー！」
「……」
「目をそらすなゴラァ!!」
途中から意識の外に置いていた二人に助けを求めるも、どうやら無視されたようだ。それもその筈、二人が私達を止めるわけがない。というよりむしろ混ざりたいとすら思っているんじゃなかろうか。流石にここは譲るつもりはないけど。
見捨てられたと察した指揮官が現実に戻ってきて私と９を見る。獲物はもう目と鼻の先だ、今更足掻こうがもう遅い。大人しく食べられちゃうといい。
口から漏れた吐息が産毛を撫で、仮装で付けた牙が首筋にぷつりと

突き立てられる。顎の力をちょっと強くしてやれば……。
「ぐぇ」
「うぎゅ」
　というすんでのところで止められてしまった。誰だ、私の服の裾を掴むのは。この火照った身体をどうしてくれる。
「お二人とも、何をしてるんですか？」
「は、はろー、一〇〇式」
「こんにちはＵＭＰ４５、ＵＭＰ９」
「ここ今年は白いワフクを着てるんだね！　そそ、それも二ホンのヨーカイ？」
「雪女ですよ」
「そ、そーなんだ！　に、似合ってるね！　髪も今日だけ染めたんだ！」
「ありがとうございます。で、何をしてるんですか？」
　一瞬で冷えましたどうもありがとうございます。雪…スノーか、それらしくきっちりかっちり冷えましたとも。
　普段とは装いが違うけど、間違いなく、一〇〇式だった。鬼の副官。司令官配下の最強角。私と９がそうであるように、指揮官と一〇〇式はつうつうの仲だ。悔しいが認めざるを得ない。
　にっこりと笑っているが、笑ってない。目が。副音声は「何してやがんだテメェラ」だろう。決してこんな汚い言葉遣いをする人形ではない、決して。でも勢いと怒りだけはこれぐらいの感情が渦巻いている。筈。
「あ、あはは…」
「えへへ、へへ…」
　笑って誤魔化しは、難しそうだ。
「４１６！　Ｇ１１！」
「「……」」
「目をそらすなー！」
「あ、手伝ってもらっていいですか？　指揮官にがっしりしがみついてるみたいで……」

「「はい」」
「う、うらぎりものぉーー！」
　まさか手のひらを返されるとは思っていなかった。最後の抵抗とばかりに指揮官に泣き落としを仕掛けるも、照れた様子の指揮官は目を逸らすばかりで取り合ってはくれず、ならばとＨＫ４１６を見てもハイライトを失った様子で黙々と私を引き剥がそうとするだけ。
　辺り一帯には、一〇〇式に引きずられるＵＭＰ姉妹の怨嗟の声が響いたのであった……。

「急に笑い出したと思った、とうとう気でも触れたのかしら」
「まさか、ハロウィーンを思い出してただけよ」
「物好きだねぇ、こんな時にさ」
「４５姉的には、こんな時だからこそ、かなぁ」
　４０４小隊は何時になく窮地に立たされていた。ここまで追い込まれるのも久しぶりかもしれない。
　Ｇ１１が目を光らせる麓で、９とＨＫ４１６の応急処置に身体を預ける。確かにこんな状況でえへへと笑えばそう思われても栓のない事か。
　ハロウィーンは、イベントは楽しい。重ねるたびに思い出が溢れて、諦めないだけの動機をくれる。どれだけボロボロになっても、絶対に生きて帰ってやるって気になれる。そうしたら、また指揮官に会えるのだから。負傷すれば、その時だけは確実に私だけを見て想ってくれるのだから、そう悪いものでもないのだし。
　右腕全損と左脚外骨格破損。仲間を庇った名誉の負傷だ、こうしなければ今頃は一人減っていただろう、後悔は無い。が、生存率はかな

り悪い。
　それでもまだ諦めたくないのは、往生際が悪いのか、それとも……
「来たよ」
「さ、どうするのかしら、小隊長殿」
「はいはい、休ませてくれないんでしょ」
　ぐっと力を込めて立ち上がる。外骨格無しでもある程度は戦える。
上半身のバランスは……まぁどうとでもするしかない。
「余裕よ」
　大丈夫、余裕よ。余裕なんだから。

女の価値は胸じゃないけどステータスなのは確か

「きゃあああああああああ！」

グリフィンＳ■■基地の朝は早い方だ。具体的には６時起きの指揮官に合わせて、人形達は５時～５時３０分の間に覚醒を済ませて各々で任務や訓練の準備に取り掛かる。

この日は特別……４１６の叫び声をモーニングコール代わりに、４１６と同じ宿舎の当基地所属の全戦術人形と指揮官までもが起床した。特に、４０４小隊の面々は直撃を受けたわけで、

「うぅ……静かにしてよぉ、寝れない…」

「どうしたの？」

「敵襲でもあるまいし…」

同室ではないにせよ隣部屋同然で横並びだった為、こうして他の面々よりもいち早く音源を訪ねていた。Ｇ１１は毛布を頭から被ったまま、ＵＭＰ９は中々お目にかかれない髪を下ろした姿で、装いを似せたＵＭＰ４５は欠伸を隠しもせず、ベッドの上でドアに背を向ける４１６へ声をかける。

普段の完璧を自負する彼女なら寝癖を同じ部隊の人形にだって晒すことなどあり得ないが、今の４１６はそんな些事に気を割く余裕など欠片も無い。それどころか三人から声を掛けられたことすら気づいていないかもしれない。実際そんなことは無かったので、ぎぎぎぎと油が差されていない数世紀前のロボットの如く、ぎこちない動きで仲間の方へ顔を向けた。

雫が描かれた側の目を引き攣らせながらそれぞれの顔を順々に見やり、４５と目が合うと明らかに不自然な笑顔を作って挨拶を返す。

「お、おはよう…」

「おはよう４１６。で、宿舎中に響く大きな声で叫んで、どうかしたの？」

４５の追及を受けた４１６はぎょっとしてベッドの上で後ずさる。蹴飛ばした毛布を引っ掴んで両手で肩を抱くように首から下を隠しながら。

「ななななな、何でもないわ！」
「……そうは見えないけど？」
「大丈夫よ！　問題ないわ！」
「それは問題しかない時の台詞だった気が…ぐえっ」
「あはは、４０年ぐらい前に流行ったんだっけ」
ごしごしと寝ぼけまなこを擦るＧ１１は言い残しながら帰ろうとするが、９は見向きもせず襟首を掴んで引き留める。
そのまま眠り始めたＧ１１は放っておいて、ＵＭＰ姉妹が未だに引き攣った笑顔で早く帰れと顔で訴える４１６をじーーっと見つめ……面白い予感を感じ取った。
４５は顎に手を当ててにやりと口角を吊り上げ、
９は指揮官が庭で飼育している狼と戯れる時の様に猫目で両手をわきわきとさせ、
「ふぅん……」
「……」
「９、ゴー！」
「イエッサー！」
４１６は当基地屈指のイタズラ好きな二人の変なスイッチを入れてしまった数秒前の自分に悪態をつきつつじりじりと下がり、背中にひやりと冷たい感触に諦めつつも、最後の抵抗を試みる。
「ちょ、止めなさい！」
「はははは、良いではないか良いではないかー！」
「そのセリフの方が問題ありまくりよ！　ちっっとも良くない！」
全力で毛布を剥がしにかかる９と、これまた全力で剥ぎ取らせまいと抵抗する４１６の攻防戦が始まった。
背中を預ける先を壁からベッドへと移し替えて、丸まりながら毛布を身体に巻くことで鉄壁の護りを敷く４１６に対して、９は毛布の切れ端を探るべくマウントをとりくすぐりを仕掛ける。毛布の厚さからあまり効果は無いが、４１６の数少ない弱点の一つだと９は知っている。集中力を削いで隙をつく作戦だ。
仕掛けられた４１６はと言うと、

「残念ね、私にもうくすぐりは効かないわ」
「なん……だと……」
「ふん、苦手は克服するものよ」
　自慢気な顔でショックを受ける９を見下していた。体勢はマウントをとっている９が上で４１６が下なのだが、見下すとはこれいかに。
　さあ、分かったらさっさとどいて部屋に戻りなさい。そう続けようとした４１６は驚愕する９の向こう……ベッドの端から９の肩越しにニヤニヤと次の一手を打っていますと言わんばかりの４５と目が合う。
　まずい、そう思った４１６は同時に本能で詰みだと直感してしまった。多分、部屋へ帰っただろうと予想していたＧ１１が４５に担がれて隣に現れたのと、９が残念でしたーと表情を一転させたからだ。
「あ……４１６のにおぃ……すき…」
「こら、ちょ……バカ…！」
　Ｇ１１は寝坊助だが愚鈍ではない。一度スイッチが入れば４０４の名に恥じない腕を披露する実力ある戦術人形だ。更に言えば、布団やベッドの上では謎の戦闘力を発揮する。あまりの無敵ぶりに、指揮官から布団の妖精と名誉（？）ある称号が贈呈されるぐらいに。
　そんなＧ１１からすれば４１６の籠城を崩すことなど造作もない。奇声を上げながら引き剥がそうと奮闘した９は何だったのかと言いたくなる程あっけなく、毛布の切れ端が姿を見せてあっという間にＧ１１が巻き取っては自分がくるまっていく。
　照れと怒りが混じった複雑な気持ちで抵抗するも空しく、だんだんと毛布は薄くなり、素足や腕、ネグリジェのレースが見え隠れしてきた。
　上半身部分を残してＧ１１は満足したのかレム睡眠に突入。９がスパートをかけるが、４１６は抵抗を止めない。
「へへ、もう観念したら？　ていうかそろそろ他の人形や指揮官まで来ちゃうよ？　私はシャツに短パンだから見られても恥ずかしくないけど、４１６はそうはいかないんじゃない？」

「お生憎様、私の日はいつもコレだから」
「むむむ」
「うぎぎ」
　当事者だけが体感できる駆け引きを繰り広げる午前４時５０分。
終了のゴングはあっけなかった。
「ははぁ～、成程ね」
「４５姉、何か分かったの？」
「うん」
「くっ…どんな出まかせが出てくるのかしら？」
「おっぱいちっちゃくなってない？」
「あんたにだけは言われたくないわよ！」
「隙あり！」
「あっ」

　通常であれば指揮官室で執務する上官に挨拶と指示を与えてもらい実行するのがこの基地の習わしだが、偶然にも、幸運にも、今日は月に一回の全員休日の日だった。流石に全員が基地を空ける訳にはいかないので、一部隊分の人員は残らなければならないのだが、それでも人と会う機会はぐっと下がる。
「ほぉ……寝て起きたら、おっ……体型が変わっていたと」
　しかし、部品交換でもしなければ外見に変化のない戦術人形にとって一晩で変化が起きるというのは異常事態である。指揮官への報告は必須だった。実際はそれが理由の半分で、もう半分はと言うと、
「あら～？　ナイスバディの４１６さんはどこにいったのかな～？」
「それでもアンタよりは大きいんだけど……！」
　日頃のうっ憤を晴らす勢いで弄り倒す４５の意趣返しだったが。
　指揮官やカリーナ始め基地職員は、予め定められたモデル通りに設

計されているのだから気にしても仕方がないんじゃないか？　と思っているが、口にした人間は片っ端から鼻の骨を折られると噂なので誰も追及しない。真相は闇の中だ。誰も彼も、自分の命が可愛いものである。

「で、どうするんだ？　４１６は元に戻りたいだろうが、アテはあるのか？」

戦術人形は大別して二種に分けられる。鉄血製か、ＩＯＰ製か。グリフィンの人形は全てＩＯＰ製で、基地の人形も当然ＩＯＰ製。ただし、４０４小隊だけはちょっと事情が違う。製造ラインが存在しないワンオフと言えば分かりやすいだろうか？　つまり、ダミーの用意はあってもメモリのバックアップやメインフレームの代替は存在しない。これが悩みの種だった。

通常の戦術人形ならメモリのバックアップを取ってメインフレームを変えればいい。同じ規格で作られているのだ、愛着があるかもしれないが、我慢すればそれで済む。

「えっ、戻りたいの、４１６は？」

「アンタねぇ…でなきゃ叫んだりしないでしょうが」

４５が純粋な視線で４１６を見つめるが、４１６はそれが子供の様な澄んだ瞳でないことを知っている。

他人のスタイルについてとやかく言うタイプではない（羨ましいものを見るというか、妬ましいものを見るような視線を送ることはある）が、比較されたり冷やかされると４５は容赦なく天誅を下す。が、以前の様に渡り歩く生活から変わってこの基地に腰を落ち着けると、周りがメリハリのあるナイスバディばかりときた。天敵だ。４５は少々神経質になりつつあった。唯一の救いと言えば、Ｇ１１が幼児体型なことと、妹の９が標準だったことか。

だから今の４５は素直に喜んでいるに違いない、と４１６は考えている。戦闘に支障の出ない範囲で自分の願望が叶ったのだから。

「４５姉…」

あんまりな姉の暴走ぶりに妹は嘆いて…いなかった。

Ｇ１１はまだ寝ぼけているのか「柔らかくて温かいよ……ぐぅ」と

聞いている側が恥ずかしくなるような言葉だけを残してソファに吸い込まれていく。
「指揮官はどう？　４１６はおっきいほうが良い？」
「え、俺？　そうだな……」
　ぼけっと４５が淹れたコーヒーを啜りながら傍観していた指揮官は、９から話を振られてじっと４１６を見つめ、彼女という存在を振り返る。普段の私服はサイズが微妙に合わなくなったので、４５のシャツを借りているらしくいつもと印象が違う。身長が違うのでこれもまた微妙に合っていないのだが。
　戦術人形は美女美少女揃い。だが、その中でも４１６は目立つ方だ。スタイルの良さは勿論、手入れの行き届いた腰までの銀髪は遠くからでも目立ち美しい。また、戦闘や内勤においても死角はなく、あらゆる業務を最高のクオリティで仕上げる優等生という評価がぴったり当てはまる。少々ストイックな面があり執着心が強く現れる事もあるが、遊びが無いわけではなく、本人は隠したがるが乙女な一面も見受けられた。
　指揮官にとって、数か月前の記念式典でドレスを纏った当基地の代表三体……４１６、ＷＡ２０００、スプリングフィールドが会場中の他指揮官と人形を虜にした事件は記憶は新しい。
　人形達は最初からそうあるべく設計されている。なので、極端な話だが人間の女性同様に手入れをしたりする必要は全くない。流石に化粧や洋服は素体とは無関係なので別だが……それでも美容に興味を示す人形は少なからずいて、彼女もその一人だ。
「まずスレンダーな４１６ってのが、新鮮だなぁ……」
「そう？　…って、ちょっと、何で写真撮ってるのかしら？」
「大丈夫大丈夫、使うの俺だけだから」
「オブラートに包む努力を放棄するな」
　グリフィンより支給される個人端末には状況証拠を残すためにもカメラ機能が搭載済み。しかし、この指揮官、時折私物の様に扱うことがあった。画像フォルダには前線に赴いた際の戦闘状況と、パーティの集合写真やイベントの写真がごちゃまぜなのである。

保存し満悦な様子の指揮官は今度こそ考えてみた。
「４１６が４１６のままならそれでいい」
「あは、４５姉と指揮官がハモったの久しぶりに聞いたかも」
「それが聞きたかっただけでしょ、どうせ。指揮官の返事なんて、分かり切ったことじゃない」
普段通りのにこにこ顔の４５、きゃっきゃと喜ぶ９、呆れた様子の４１６、眠りながらもしっかり盗み聞きしていたＧ１１。この場にいる人形全員が予想していた回答に、それぞれがそれぞれの反応を示す。指揮官はぽかんとした様子も一瞬だけ、納得するとため息をついてコーヒーを啜る。
「ま、如何にも４５が聞きそうな事よね」
「だって、私が誓約する前から副官は４１６とかスプリングフィールドとかタボールとかＧ３６とか――」
「……４１６」
「……」
この話が始まると４５は長い。４１６も流石に申し訳ないといった表情だった。
「伊達に指輪を二つ貰ってないもんね！」
そして９がこうやって締めるまでがテンプレとなっている。
指輪が二つ。
この基地で誓約済みの人形は六体。４１６もその一人だが、左手の薬指に指輪が二つあるのは二体のみ。自分がその二分の一であることが、４５にとっての精神安定剤であり、誇りであり、喜びであり、戦う意義になりつつある。
ちなみにもう一体は察しの通り鬼の副官こと一〇〇式。さらに蛇足だが大きい小さいかで言えば小さい。
「話が逸れたな。えっと……アテはあるのか？」
「そこまで戻すの？　うーん、ペルシカに頼るしかないよね」
「やっぱそうなるわな。４５、どうせ別件の報告があったろ、合わせて頼む」
「はいはい」

茶番も終わり、概ね満足した様子の三人はそれぞれ手付かずになっていたコーヒーを飲み干して立ち上がる。４０４小隊にＯＴｓ―１４を加えた第二部隊は宿直当番ではない。自分達でペルシカと連絡をつけさせ自力で解決するよう指示してこの件を片付けた。

月に一回の休暇と言っても、それは日頃前線で命をかける人形達への感謝と慰労の一日を指揮官が勝手に設けただけであり、グリフィンという組織はそんな指示を出しておらず、云わば身勝手な有給だ。当然、指揮官は出勤である。

そもそも、指揮官は今回のからくりについて無害であると確信している。今朝の悲鳴こそ慌てたものの、一瞬で答えにたどり着いた彼は取り乱さずコーヒーを啜るなど。終始マイペースなままだ。被害者の４１６もそんな指揮官の落ち着いた様子を見たからこそ、解決できる程度の問題だと安心して談笑に興じているのだった。

「Ｇ１１は？」

「いいんじゃない？　休日だし、指揮官の邪魔じゃなければ」

「おう」

「はーい。じゃあね、指揮官」

９が最後に指揮官へ手を振って退室する。ぴしゃりとドアが閉まった途端に執務室は静寂に包まれ、アンティーク物の振り子時計が規則的に立てる音だけが響く。Ｇ１１の寝息は聞こえない。

４５が淹れたコーヒーの残りを一気に飲み干して、テーブルに置かれたカップを三つ回収し捨てる。眠気を引き摺っていたところで４０４の訪問だ、コーヒーと相まって覚醒には丁度良かった。

さて。と指揮官は独り言ちて気合を入れなおし、キーボードを叩く。

その３０分後、Ｇ１１は目を覚ました。

「あれ、みんなは？」

「帰ったぞ」

「うう、置いて行かれちゃった」

くあぁ、とあくびをしたＧ１１は自分のコーヒーを用意してずずずと啜る。その珍しい行動に指揮官は内心で驚いていた。

「で、ホントはどっち」
「何がだ？」
「おっきいのが良いのかどうか」
「ああ、それか」
　タイピングの手を止め、指揮官も自分のコーヒーを用意してＧ１１の対面に腰を下ろす。お茶請けのクッキーをＧ１１に差し出し、あーんと口に入れてやる。どう見ても餌付けにしか見えないが、Ｇ１１はこれが好きだった。
「大きいほうが良い」
　指揮官はさっきと全く違う答えを立てた。Ｇ１１も驚いた様子はない、まるで予想していた通りだと言わんばかりだ。クッキーをもぐもぐと味わっている。
　彼にとっては、先程言った事も今言った事も、どちらも本心。４５が居たからと言うのもあるが、誰よりも４１６がその答えを欲しがっていたからああ言ったまで。今はＧ１１がその答えを欲しがっているからこう言ったまで。重ねて言うが、嘘は言ってない。
　美意識を持ち人間の女性同様に手入れを欠かさず、女を磨く彼女らに対して「どっちでもいい」という返事はタブーなのだ。
　身近な人間の女性で思い浮かぶのは今頃爆睡しているであろうカリーナ。彼女は年頃の女性らしく化粧品に敏感で、肌の手入れを欠かさず、カロリー計算に頭を抱え、本部のヘリアンのように行き遅れにはなるまいと指揮官へのアピールが激しい。
　そのカリーナが自慢のスタイルが崩れたとして、嘆くのは想像に容易い。それが今回の４１６と何が違うだろうか？　４１６は鉄血を屠る為に産まれた戦術人形であり、今は女性らしさを磨く年頃の少女なのだ。そんな彼女らに「どっちでもいい」と言うのは酷だろう。
　そしてもう一つ、女性は解決よりもまず先に共感を求める。それが女性だらけの職場で指揮官が学んだ真理の一つだった。
「その心は？」
「謎かけでも何でもないぞ？　自分のスタイルに自信を持ってくれた方が良いじゃないか。女の子だなーって思えるし、そそる」

――自信なさげで恥じらう姿も可愛いしこみ上がるものがあるんだがね、４１６なら完璧な自分を見てほしいって思っているときが一番イイと思うんだ。それを堪能するも良し、あるいは相手のペースを崩して慌てる様を味わうもよし。

と、いうのが指揮官の頭の中である。

「だよねー。ふわふわでもちもちで温かくてさー。もー寝心地抜群……って、うわ…」

当然ながら、Ｇ１１は引き気味だ。きっと頭の中のを見せてしまったら指揮官としての尊敬すら失うかもしれない。そんなことに気づく指揮官ではないが。

「うわーってなんだようわーって。てかお前、そんな贅沢をしてんのか…」

「指揮官もお願いすればいいのに。気合入ったネグリジェ着るぐらいだし、いけるいける。あっ、そう言えばこんなものがあってね…」

「こ、これは！　今朝のネグリジェ４１６スレンダーＶｅｒの画像データ!?　い、いつの間にこんなものを……」

「ふふふ、ほぉら、ほおぉら」

「これはまるで、添い寝してほほ笑んでいるかのような一枚…!?　くそ、相変わらずいい仕事してるじゃないかＧ１１!!」

「欲しい？」

「……欲しい」

「じゃあどうしよっかなー……うん、休みを一日追加と、〝ごほうび〟をくれたら、いいよ」

「……お前、だいぶ染められたな」

「もしもし？　ペルシカ？　こちらＵＭＰ４５。薬の成果だけどね……うん、ちゃんと効果でてるよ。データ送る。私の？　いやいや、

使ってないよ。……それは、まぁ、おっきくなりたいなぁって思ったこともあるけど、変わったら指揮官がもっと見てくれるってわけじゃないし、使うなら私の日と指揮官の休みが被った日にしたいし……え、やだ。……うーん、別の検体？　でもＧ１１にも指揮官にもバレてるだろうし、他の人形に試すと一〇〇式が……あ、ごめんちょっと。９、今電話中だ…あらー、ナイスバディ４１６さんじゃないですかー、お久しぶりですー、じゃ、私はこれでえええええええ!!」

行き過ぎですって４１６さん

「指揮官には私さえ居れば十分よ」

「む」

Ｍ１８９５は指揮官の執務室にノックをした上で入室し、眉を顰めた。視線の先には我らが指揮官がいつもの如くそこそこ立派なデスクとチェアに腰掛けてキーボードに指を添えているが、滑らかに動いていなければならないソレは微動だにしていない。

軍帽は頭の上……ではなく、モニターの角に引っ掛けられていた。

Ｍ１８９５命名、仮眠の構え、である。

「お主…」

「……」

「お主ーーー！」

「うお！」

癖のある幼い声が指揮官の耳元で炸裂し、仮眠とはお世辞にも言えない程深く沈んでいた指揮官は文字通り飛び起きた。勢い余って椅子ごと倒れそうになるものの、鍛えた体幹で堪え、目覚ましと焦点が合うと気まずい表情で、

「お、おはよう」

と言った。

「騙されんわ！」

しかしＭ１８９５は怒り心頭と言った様子で挨拶の返事もすっ飛ばして、背格好の割には堂の入った説教を垂れる。挨拶から世間話を始め終いには秘蔵の菓子や茶でなあなあにする指揮官の手口を彼女は良く知っているからだ。何せこの一週間、毎日の様に手練手管を変

えて言いくるめられたのだから。その度に自分が年長なのにと悔しい想いをしていた彼女は今日こそバシッと言ってやるべく、口を挟む隙を与えないつもりだった。
　左手を腰にあて、右手の人差し指でキーボードの痕が付いたほほをぐりぐりとねじり、抓む。
「いた、いたたた！　痛いってばーちゃん！」
「誰がばーちゃんじゃ！　田舎で土いじりが趣味の祖母のような呼び方をするでない！　おばあちゃんと呼ばんか！」
「どっちも変わんねーいててて！」
　またしても話を逸らそうとした指揮官に主導権を握られまいと、話を逸らされまいと無言で口封じ（物理）。すまん、悪かったと指揮官が口にするまでの数分間、ひたすら無言でほほをつねり続けた。
「まったく、何度も言わせるでない。勤務時間は守れ、残業はするな、三食――」
「三食きちんと食堂で摂れ、休みはしっかり休め、部屋で寝ろ。だろ？
　耳にタコができるくらい聞いたよ」
「分かっとるなら言う事を聞け」
「文句は終わらない量の仕事を押し付けるクルーガーもといヘリアンに言ってくれ」
「その言い訳も耳にタコができるくらい聞いたわ。お主、この後に儂が言う事も分かっとるの？」
「一人形にそんな権力無い」
「うむ」
「はぁ」
　Ｍ１８９５も本当は分かっている。自らの指揮官が多忙な事も、本人の処理能力を超える依頼や仕事が押し付けられていることも。
　クルーガーとヘリアンへの直談判など数え飽きるほど行った。人形だからと話を聞かない堅物でない事は知っている。Ｍ１８９５は今でこそ一戦術人形として現場で銃を握っているが、Ｇ＆ａｍｐ；Ｋが第二世代戦術人形を扱い始めた頃から在籍する古株なのだ。当然、ある程度の口利きは出来る。

それでも指揮官の待遇が代わったことは無い。出来ることは尽くしたうえでこうなのだから、Ｍ１８９５は半ば諦めた。あの二人でもどうしようもない程、自分の指揮官は重たい役目を背負っているらしい。末端が知らないだけで、もう二つほど基地の管轄をしていても驚きはないだろう。

好きで残業など誰がするものか。指揮官が身を削っているのは全て基地の為。引いては前線で命を懸ける自分を含めた人形の為。

だからこそ、余計に自分を労わることを覚えて欲しいというのに。

彼女がこうして毎日の様に様子を見に来るのも、少しでも疲弊した指揮官をねぎらう為だった。その目的を果たすために、今は愛飲しているコーヒーを淹れる。

「ありがとう」

目に隈を作った指揮官はくたびれた笑顔でマグカップを傾ける。取っ手を握る手が震えている様が痛々しくて、Ｍ１８９５は視線を逸らす。その先には時計があり、時刻は午前８時ぴったりだ。

「一段落付いたら朝食じゃぞ」

「うーん」

「……なんじゃ、そんなに急を要する案件が多いのか」

「そんなところ」

「なら終わるまで待つ」

「……結構掛かるよ？」

「構わん。寧ろ手伝わせんか」

「それはちょっち無理があるなぁ」

たはは、と笑いながら指揮官が空になったマグカップをＭ１８９５へ差し出す。複雑な表情でそれを受け取り、二杯目をデスクの邪魔にならない場所へそっと置いた。

出来ることと言えば、こんな給仕まがいの事だけ。それでも指揮官が楽になるなら、とソファとデスクとコーヒーメーカーの往復を繰り返す。

それが５回目を迎えようとした時、時間にして８時３０分を過ぎた頃にドアをノックする音が響いた。

「４１６です」
「あぁ、入れ」
「失礼致します」
　現れたのは二ヶ月ほど前から見かけるようになった戦術人形だった。銀髪に涙のタトゥー、融通の利かなそうな、しかしこれといった欠点の無い優等生タイプ。確か……ＨＫ４１６とか言ったか。
　――またか。
　Ｍ１８９５はそう思ってしまう。会社そのものと古い付き合いの彼女は、当然ながら指揮官とも長く働いてきた。今でこそ適材適所が出来るほどの大所帯だが、当初はなんでもかんでも自分が回していたものだ。それでも、例えどれほど優秀な人形が加わったとしても、指揮官の右は譲らなかった。
　しかし、この女は現れたその日から、まるで何度も修羅場を潜り抜けてきたパートナーであるかのように馴れ馴れしく接している。指揮官は珍しく人形に対してフランクで、軍規を押し付けない性格なので気にしていないようだが、Ｍ１８９５を始め４１６に対し不信感を抱く人形は少なくない。
「おはよう、Ｍ１８９５」
「うむ。おはよう４１６。猫の面倒はもう良いのか？」
「珍しくＩＤＷがやる気だったから任せてきたの」
「ほー。今日は銃弾でも降りそうじゃの」
　言葉の端々に〝にゃー〟とつけるＩＤＷだが、猫に対して敵対心を持っている。自分のキャラを奪われかねないとでも思っているのだろうか？　そんなわけなのであまり世話をしたがらないのだが、稀にやる気を見せる時がある。今日はたまたまその日だったようだ。
「そう言えば…」
「？」
「Ｍ１８９５、スプリングフィールドがあなたを探していたわよ。確か貸したものを返して欲しいとか」
「……あ〟っ」
　４１６に言われて何のことかを思い出したＭ１８９５からみるみ

る内に表情から血の気が引いていく。〝怒らせると怖いライフル部門〟堂々の四年連続第一位を死守するスプリングフィールドとの約束をすっぽかすとなれば、仕方のないことかもしれない。
慰労の為にと訪れたがこればっかりは許してくれお主！　と心で唱えながら、Ｍ１８９５は老骨に鞭を打つように全速力でカフェへと走っていった。

「行ったわよ」
４１６がドアの施錠と同時に教えてくれる。
もう限界だった。
俺は椅子から転げ落ちながら戸棚へ這いずり、震える手で金庫のダイヤルを回す。元々備え付けられた重要書類やデータディスクを収めるそれとは別で、自ら改造して壁に埋め込んだ特性のそれには、見られるとかなりマズイものが隠してある。
クスリ……と言うと誤解を招くかもしれない。が、間違っていない。いやその通りだろう。
アッパー系と言われる興奮剤だ。かれこれ数ヶ月はこれの世話になりっぱなしだった。
壁に背中を預けて、震える手で瓶の蓋を開けて指定容量よりも少なく取り出す。いつの間にか俺の真横に膝をついていた４１６から水を受け取り飲み干した。飲んですぐ効くものじゃないが、気持ちは落ち着いた。３０分もすれば震えも止まるだろう。
「……大丈夫？」

「ああ、何とか」
真顔で俺の顔を覗き込む４１６。大丈夫だと微笑み返して、いつもの通りに彼女に甘える。スカートから除く生足に頭を乗せて双房越しに整った顔を見上げた。ため息を付きながらもそれを許してくれる、どころか頭まで撫でてくれるんだから彼女は優しい。
医薬品は飲むタイミングが大事だ。常用なら尚更気をつけなければならない。今日はただでさえ寝過ごした挙句、何も知らないＭ１８９５の手前で飲むわけにもいかず、軽く禁断症状を起こしかけていた。
入室と同時に察した彼女の洞察力は流石としか言いようがないな。
「指揮官」
「うん？」
「その、言いにくいのだけど……」
「……あぁ、うん、分かった…。ちゃんと眠るよ」
４１６は気まずそうにもごもごさせている。何となく言いたいことは分かったので、手でストップのジェスチャー。
Ｍ１８９５が言ったように、４１６も部屋で休んでほしいとずっと口にしている。Ｍ１８９５が朝様子見に来たように、４１６もまた俺の状態を確認に来ているのだ。日に日に隈を濃くして、挙句薬の時間を寝過ごして禁断症状を起こしてしまえば注意せざるを得ないだろう。
というより、ドラッグに頼りながら仕事を続ける異常者の心配か。
ともかく、今回は流石に堪えた。今日は大人しくベッドの世話になろうと決める。
ベッド。
ベッドか……。
帰りたく、無いなぁ。恐らく待っているであろう悪夢を想像してくしゃと顔を顰め、４１６には見せまいと腕で隠す。
思い返すだけで胸が苦しくなって掻きむしりたくなるし、額を打ち付けて無能な頭蓋を砕きたくて仕方が無い。まさか思い出がこんなにも自分を深く抉ってくるなんて、あの頃の俺は思ってもいなかっ

た。
「指揮官、今日はいっぱい仕事をしましょう？」
「４１６？」
「一休みして、ご飯も食べて、全力演習なんて良いかもしれないわね。溜まった書類も、普段後回しにしがちな企画書も提案書も全部今日で片付けるの。勿論、私も手伝うし、Ｍ１８９５みたいに副官経験のある人形ならきっと手伝ってくれるわ。最後に掃除して、時間めいっぱい働いてくたくたになって帰りましょう？」
「……」
「これでもかってくらい疲れてしまえば、少しは悪夢を見なくても済むかもしれないじゃない？」
「どう、だろうなぁ」
「私も一緒にいるから、ね」
　暗い瞼の向こう側で、優しく微笑んでくれている姿が容易に想像できる。優しく頭を撫でる柔らかい掌が、人間と区別のつかない弾力と温かさで包み込む太ももが、普段の完璧主義を貫く彼女とはまた違う一面もあるのだと教えてくれている。
　うっすらと、瞼を開けば視界いっぱいに移ったのは４１６の顔。器用に長い髪が俺の顔にかからないよう手で抑えたままずっと待っていたのか。
　顔を隠していた腕を彼女のほほへ伸ばして、そのまま後頭部を撫でながら顔を近づけて唇を重ねる。唐突なキスもまるで分かっていたかのように受け入れ、どこか嬉しそうだ。
「元気は出たかしら」
「わりと。偶には真面目に働かないと、いざって時に言う事聞いてくれないと困るし」
「そうね……ここの人形は言う時は言う子が多いから。威厳、見せときなさい」
「そうするよ」
「……起きなさいよ」
「あと十分」

「馬鹿言わないで。ほら、そうと決めたらキリキリ動く」
……俺の天使様は甘々ではないらしい。それが彼女の良さでもあるんだが、それこそ偶には見せてくれてもいいんじゃないか？

指揮官の個室には窓が無い。鉄血がそこから侵入してきたら流石の私達も守れないから、と４５がぶっ壊した。その代わり少ない電力でも十分な光量を持つ特別な蛍光灯を付けている。
これといった趣味を持たない指揮官の部屋は殺風景だ。支給された最低限の家具と持ち帰った資料だけの部屋に飽きた９が、４５に叱られて片付けるよう言われたぬいぐるみを持ち込んだお陰で、独身男性の部屋とは思えないほどファンシーに。ただし、ぬいぐるみのチョイスが絶望的なのでお察しであるが。
上官ならさぞ良いベッドで眠っているのだろうと企んだＧ１１はこっそり忍び込んで、人形に支給されたものより劣悪な寝心地で一度キレたことがあった。珍しく真面目なＧ１１にびっくりした指揮官は自ら正座し、懇々と頷いたとか。使い道のない給料を奮発したベッドはＧ１１も唸るほどに変貌した。
今はもういない彼女たちの残り香が、この部屋には色濃く残されている。物についた彼女たちの匂いが、一つ一つにまつわる彼女たちとの思い出が、壁のコルクボードに飾られた一枚の……４０４小隊の写真が、指揮官の心を深く強く抱きしめて、傷つけたまま放さない。
残されたのは、この部屋と、辛うじて私が回収してきた……というより形見代わりに押し付けられたコートやアクセサリーの類ばかり。４０４の性質上、私達が収集してきた所有物は全て使途不明品として

廃棄されるのだ。何かを形で残すなら指揮官の私物として渡す他ない、というのが４５の考えだった。実際その通りになって今では空き部屋となっている。

「……ｚｚｚ」

「もう…」

今朝うんと働いて疲れてしまえば悪夢を見る余裕も無くなる、確かに自分がそう言ったし、考える間も与えず仕事で忙殺してやった。お陰様、部屋に入った瞬間に意識を飛ばした指揮官はベッドにふらふらと歩み寄って夢の世界へ旅立っていった。

これでは多少なりと期待していた自分が馬鹿みたいだ。もう少し加減すべきだった。

制服とシャツ、ズボンをキャストオフさせて、自分もラフな格好に着替えて同じ毛布にくるまったのが１５分前の事。特にうなされる様子も無く、規則的な寝息を立てるだけ。今のところは、くたくたに疲れさせた効果が出ているらしい。

「ふふ」

のんきな、けれど安らかな顔だ。あの日から数か月ぶりの表情に、思わず笑みがこぼれてしまう。しかし取り繕う必要も無い。指揮官は熟睡していて、それを眺めているのは私だけなのだから。

音を立てずに布団の中でにじり寄り、程よく筋肉のついた右肩にそっと手を這わせ、少し抑えきれなくなって抱き枕の様に右腕を抱く。血が通い、毛布で温められた抱き枕は非常に硬いのだが、どんな高級寝具よりも安らぎを与えてくれる。

ほのかに香る支給品シャンプーの雑な匂いと、男性らしい香りが混ざったそれが鼻をくすぐって、眠らなければならないというのに心を昂らせた。

あぁ、指揮官。

好き。

好きよ。

愛してる。

あなたは初めて会ったその日、その一言で私達の心を奪った。ただ

補給に立ち寄っただけの基地、一晩世話になればまた戦場を渡り歩くだけの毎日に罅を入れた。それだけ、でもそれだけで十分過ぎた。
『４０４小隊です。本日はお世話になります』
『うん、おかえり。ＵＭＰ４５、ＵＭＰ９、４１６、Ｇ１１。時間まで好きに過ごすと良い』
『……えっと』
『？　何かおかしなことを言ったかな？　君達はグリフィンの戦術人形なんだから、基地は帰る家なんだろ？　だったらおかえりなさいだし、家なんだから好きにくつろぐもんさ』
『……ねぇ指揮官。だったら、ずっと寝ててもいいの？』
『なんだ寝るのが好きなのか？　良いとも。空き部屋が幾つかあるから、せんべい布団を数枚重ねてみ。少しはマシになるから』
　好きに過ごせ、なんて言われてもこれといった趣味を持たない私達は少々困った。だから、寝たがりなＧ１１がそんな感じに切り出したのは助かったし、到着早々に寝たいなんて我儘を快く許した指揮官に対しては好感半分疑惑半分と言ったところだった。
　私達は戦術人形だ。鉄血を殺して殺して殺し尽くす為に銃を握る。第二世代は人間に近い思考と身体を与えられたからなんだというのだ。殺せと命令されれば殺すのが役目、人間と私達のおままごと。結局はそういうもの。
　しかし、いや、だからこそ、だろうか。
　おかしな人間だ、と４５も呟いた。そう、おかしな奴。不安や疑惑もあったけど、その分だけ興味を持った。
　後は指揮官という沼にどっぷりと肩まで浸かって抜け出せなくなるまで、そう時間は掛からない。文字通り、あっという間に骨抜きにされちゃったんだから。
「ん……」
「…あっ」
　身じろぎした指揮官が右腕を抱いていた私を左腕で抱きしめた。先程までの穏やかな寝顔は少し陰って、眉を顰めている。急接近した整った顔には滲んだばかりの汗。

汗、指揮官の。
「はっ、はあっ……へっ」
頬を湿らせる極上の雫を、私、わたしは…下品にも犬の様に、
「あっ」
「あああっ」
「あはっ♡」
「　　」
舐めた。
ぺろりと。
こんな、この世の贅を尽くしたフルコースすら足蹴に出来る甘美。私だけが味わえる、私だけが知っている。世界一博識なスパコンでも知らない、これでもかと分厚い本にも載ってない、私だけのでざぁと。こんなものが、この世に存在してもいいのか？
電脳が排熱処理が追い付かずにエラーを吐き続け思考が鈍り、味覚と嗅覚のダブルパンチが全身の神経を弾丸よりも早く駆け抜け、つま先から髪の先端まで電流が迸って、唾液がじゅわっと溢れて、潤滑油が下着と指揮官の指先をぐっしょりと濡らす、禁断の果実が？
「うふ」
良いに決まってる。その為に４０４は潰したのだから。私の大切な大切な仲間を、９の言葉を借りるなら〝家族〟を投げ打ってようやくつかみ取った、極上の果実だ。
存分に味わい尽くさなければならない。義務……そう、義務よこれは。四等分、平等に与えられた愛情を独り占めした義務がある。三人の分まで、私は一分の一になった愛情を注がれなければならない。享受しなければならない。啜らなければならない。しゃぶりつくさなければならない。骨の、骨の骨の骨の髄まで。
これが悦び。たまんないわ、ほんと。鉄血の屑をハチの巣にバラバラにぐちゃぐちゃにしてやるよりも、Ｍ１６の悔しがる様よりも、何よりも素晴らしい快楽。これこそが幸せなのよ。
「……ねぇ、指揮官」
一滴も逃がしはしないと伸ばしていた私の右手は彼の首筋を捕え

て離さない。力を少しだけ込めて、それを支えにゆっくりと浮上し、外気に肌を晒す。やがて胸の位置に指揮官の頭が収まる具合で留め、そっと抱きしめた。

「私は指揮官のモノ。指揮官だけのお人形よ」

返事は無い――筈なのだが、私を抱いていた左腕が腰から私の顔へ伸ばされる。ただの寝返りと同じ反応に、私の心は単純にも満たされていく。それだけのことが嬉しくて、嬉しくて。重ねた私の左手と指揮官の左手から鳴るカチンという音が、たまらない。

まぁ、言いたいことはそうじゃなくて、

「指揮官には私さえ居れば十分よ」

諸々の事実は揺るがないと言う事だ。

ＡＲ―１５「生きてるって素晴らしいわ」

「一〇〇式の元気がない？」
「そうなんだよ」
午前のスケジュールを終えた指揮官は最近の悩みを今日の副官を務めるＳＴ　ＡＲ―１５に相談していた。先日の大規模作戦の折に自殺まがいの行為を行った彼女は、謹慎処分と監視を兼ねて一ヶ月の無休と実戦禁止を言い渡されている。事務処理もそつなくこなせる彼女を遊ばせる余裕の無い当基地では、実質の副官縛りであった。
誰よりも戦果に執着している彼女には堪える罰だろう、というのが指揮官の考えだった……のだが、なぜか当の本人は落ち込むどころか目を輝かせる始末。何故か？　と頭を抱える指揮官の反応を見てＭ４達は苦笑いを浮かべつつ、ＡＲ―１５の肩を叩いていたり。副官ローテーションから一ヶ月外された面々は逆に不満たらたらで、見事にやらかしたのが一週間前。
ここ最近の話し相手と言えば、副官席でばばばばと書類を捌くＡＲ―１５、話題の一〇〇式、面白がっているＵＭＰ４５、監査を控えたヘリアンぐらいのものだ。カリーナ？　有給一週間をくれてやったら泣いて喜んで実家に帰ってる。ウチはホワイトなんだ。
だから、というわけではないが、目に見えて元気を無くしている一〇〇式は見るに堪えない。貧乏性ながらも元気いっぱい。それが彼の相棒である。
「珍しいですね。真冬の寒い季節に指揮官が間違えて一〇〇式のマフラーを洗濯機に突っ込んでおきながら出撃させて、挙句マフラーを台無しにしてもげんこつで済ませる彼女だというのに」
「え、何で怒ってるの？」
「他の女が落ち込んでるから励ましたいなんて相談をされて喜ぶと思いますか？」
「……スミマセン」
ＡＲ―１５はため息をつきながらそう返した。「なんでこんな人に……」とぶつぶつ呟いているが、なんだかんだで頼りにされて喜んで

いる。
「どうせまた怒らせることしたんじゃない？」
「うーん、心当たりが無い」
「でしょうね。指揮官の主観は頼りにならないので」
「うぎぎ…」
「だから、元気をだしてもらう方法を考えましょうか」
　整理を終えた書類を脇にやり、席を立ったＡＲ―１５は二人分のコーヒーと菓子を用意して応接用のソファに腰を下ろし、ちらりと物欲しそうな顔でアピールする。長い休憩になりそうだと思いながらも、指揮官はＡＲ―１５と並んで深く座りコーヒーを受け取った。
「何かプレゼントするのがベターなんだが…」
「彼女に限っては、悩みの種ですね」
　一世紀ほど遡って第二次世界大戦、一〇〇式の祖国こと日本は資源の捻出に喘いでいたと記録があり、国民の生活は苦しいものだったと言われている。貧乏性はそこから来ているのだろう、羽目を外す時は全力で楽しむのだが、日ごろの贅沢にはめっぽう厳しい。
　特に大規模作戦を終了したばかりでどこの基地も疲弊しており、この基地も例外ではない。節制に励む時期に君の為にとプレゼントを用意しても一喝されるのは目に見えていた。
　しかし、この指揮官にはアイデアがあった。
「部隊全体に振舞い且つ一〇〇式が特別喜ぶもの、これなら大丈夫だ」
「確かに……それなら少しの小言で済みそう」
　色々と頭を凝らして最適解にたどり着いても小言が返ってくるのはご愛敬。
「でも、少々ハードルが高いような。平時と比べて資源も余裕が無いし、これだけの人数が揃っている場所で全員が喜ぶものが、果たしてあるのか……」
「うん。だから、ＡＲ―１５、お前が頼りだ」
「えっ……？」

「はぁ……〜〜〜」
指揮官室を退室したＡＲ―１５は、それはそれはふかーーーく長いため息をついた。一瞬でも、一ミリでも、うわついた気分に浸った自分と、いつもの様に上げて落とした指揮官に。
「有益な情報が得られそうな人形をピックアップしたから聞き込みをしてくれって……。私が少々干されていること、気づいてないのかしら…」
右手には指揮官から手渡された殴り書きのメモ。そこには一〇〇式と特に仲の良い人形と、あの生真面目の餌食になってしょっぴかれる悪戯好きな人形の名前がつらつらと並んでいる。
仕事は先ほどまでの自分がバッチリ片付けてしまった為に時間はたっぷり、謹慎中の身なので他の仕事はふってもらえず、一〇〇式の仲良しは殆どが副官なので指揮官では話にならない。まるで計画されているかのような状況だ。
いや、まだそれだけなら良い。最も足を重たくしているのは、自分で愚痴ったように干されている事。
先日の大規模作戦では独断専行をした挙句、自殺まがいの行動に出た。一〇〇式が私の意図にいち早く気づいたお陰で結果的に私は生き延びて作戦も無事に成功で終えることが出来たが、みんなを危険に晒し、命令違反を犯した事に変わりはない。その上のうのうと副官を任されているのだ、周囲としては許せないだろう。それこそ一〇〇式なんかは特に。
指揮官の考えが分からないなんて、この基地ではあるある話。仕事も無い私に振られた新しい任務だと割り切って、リストに並ぶ名前を見て再度頭を抱えた。

「一〇〇式の好きなもの？　分かんない！」
「はぁ、そうよね、アンタに聞いた私が馬鹿だったわ。というか、指揮官が馬鹿だわ」
「ねーちょっとー、聞かれたから答えたのにそれ酷くないー？」
　まずは一番聞きやすい人形から始めようと思い、ＳＯＰⅡの元を訪れていた。胡坐をかきながらコレクションの鉄血目玉でお手玉をしている。メカメカしい両手で傷をつけずに十個も躍らせる様は、意外な器用さを持っていることが伺えた。
　ＳＯＰⅡは悪戯好きというわけではないが、悪趣味っぷりから小言を言われることが多い。そもそもそういう性格で、本人も場を弁えるつもりがあることは一〇〇式も理解しているので釘をさすことは無いが、その場にいる純粋な子（Ｇ４１がいい例）に悪影響が出そうなときはその限りでない程度。
　彼女は最古参の人形なので、基地でも古株なＡＲ小隊は私も含めてわりと関りが深い。ただ、Ｍ４と私は真面目な話だけ、Ｍ１６は酒癖が悪いと怒られるばかり。確かに、一番こういう雑談をしてそうなのはＳＯＰⅡとは思う。ＲＯはまだ慣れてないだろうし。
「参考程度に聞くけど、アンタなら何が欲しい？」
「みんなが喜ぶものでしょ？　だったら休みかカフェのチケットとか？」
「ま、その辺になるわよね。ありがと」
「どういたしまして。今度の配給がたのしみだなー！」
「……はいはい」

「で、私の番？　大変ね」
「全くだわ」
　苦笑を漏らしながらも部屋へ迎え入れてくれたのはＵＭＰ４５。
　誓約の証はＧ＆ａｍｐ；Ｋが特定の指揮官にのみ販売する強化装備

の一つ。条件の一つに信頼し合えるパートナーであるかどうかの項目があることと、その形状が指輪であること、ケースが質素且つ豪奢なことから、結婚指輪扱いになっている。ぶっちゃけステータスアップはおまけ。

指揮官はG&Kの中でも人形を大切に扱う珍しいタイプで分け隔てなく接し、一般職員含めてとても人気がある。そんな指揮官から特別な愛情を注がれる人形は、六体。ひじょーに高い倍率の中、見事勝ち取った人形が六体もいるのだ（一部特殊な事情で誓約した子もいるが）。これ見よがしに見せつけるような煽り行為をする人形達ではないが、時折指輪を愛おしそうに眺めたりする目撃情報は後を絶たず、今日も何処かで指輪を欲している人形が血反吐を吐いている。かくいう私もそのうちの一人なのだが……。

その中でも更に、更に特別な人形が二体。二つ指輪を貰っている人形が居る。

一〇〇式とUMP45だ。指揮官大好きクラブ（命名：M16）の絶対王者である。

多分一番仲の良い人形ではないだろうか？　一〇〇式と冗談を言い合うのは彼女ぐらいだと思う。

「そうねぇ……色々と役に立ちそうな情報は持ってるけど、ごめんなさいね」

「貴女にそう言われると、こちらとしては詰みと同義なんだけど」

「教えてあげるのはいいんだけど、それじゃかわいそうだから」

「誰が？」

「誰かさんが」

決して崩すことの無い余裕を持った笑みは、今のような勿体ぶって教えない時には無性に腹が立つ。何より不気味。幾度となく部隊の窮地を救ってきた頭脳である彼女に、そんな視線を向けられては落ち着かないものだ。

「そんなに難しく考える必要はないわ。誰だって喜ぶものでも用意してみれば？」

「むぅ、一〇〇式の喜ぶもの、のぉ」
「どうかしら」
「むむむむ」
　部隊のご意見番、Ｍ１８９５。唯一、一〇〇式よりも指揮官と付き合いの長い人形で、Ｇ＆ａｍｐ；Ｋ最古の第二世代らしい。上層部とも強いつながりを未だに持っており、鶴の一声で改革を起こせるとかなんとかかんとか。本人も指揮官も否定しないのでウワサに尾ひれがつきまくっている。
　設定盛りすぎとからかわれそうなものだが、その話が今日まで真実味を帯びているのは、ひとえに含蓄ある説教と豊富な経験と知識から授けられるアドバイスだろう。
「あやつは中々自分の願望を語らんからのぉ。好みは察しがつくが」
「流石ね。それで？」
「……４５は何か言うておらんかったか？」
「ＵＭＰ４５？　そんなに難しく考える必要は無いとか、誰でも喜ぶものとかは言っていたけど」
「ああ、そっちか。だったら儂もそれっぽく答えておく。偶には里帰りでもさせてやれ」
「……はぁ」
　これだから年寄りは…。
「世話好きって思っていたけど、そうでもないのね」
「だからこうやって話を聞いておるではないか」
　少々むすっとした態度で見上げてくるＭ１８９５。どうやら具体的に教えてくれるつもりはなさそうだ。ＵＭＰ４５もそうだったが、一〇〇式の好みや欲しい物は知られるとマズイ物なんじゃないかと思えてくる。危ない事でもしてるんじゃないでしょうね？
　この様子だと、他も期待できないなとＡＲ―１５は思った。

　曲がり角に差し掛かる中、そいつは向こうからやってきた。
「次は……「わぁっ！」きゃっ！」

「あはは！　カワイー！　ＡＲ―１５ってそんな可愛いい……え、ＡＲ―１５？」
　誰が差し掛かったのかも確認せずに大声で驚かせたのは、探していたＰ７。華やかなシスター服に猫耳付きのヴェールは特徴的で、４５とはまた違ったにやけ面が良く似合う悪戯っ子。反応が面白い奴で遊ぶらしく、派手に驚くスコーピオンや弱気なＴＭＰが餌食になるが……
「は、はは、私ちょっと用事を思い出しちゃったー……」
「だから？」
「さらばっ!!」
「待ちなさい」
「ぐえっ」
　自分が逃げ切れない相手やプレッシャーを感じる相手を嫌っており、そういうタイプには絶対に悪戯を仕掛けないらしい。なんと動物的な。
　例えばスプリングフィールド、例えばトンプソン、例えばＯＴｓ―１４。
　例えばＡＲ―１５のような。
　じりじりと後ずさりを三歩だけは許されたＰ７だったが、振り返った最初の一歩を踏み出すことは叶わず、がっしりと頭を鷲掴みにされ、ＡＲ―１５の細腕からは考えられないような力で持ち上げられた。
　アサルトライフル最高射速を実現するその指には、きっととんでもない握力が秘められているに違いない。
「いたたたた!!　痛い痛い！　ごめんなさーーーーーい!!」
「Ｐ７。貴女は何も見ていないし聞いてない。そうね？」
「見てない！　見てないよー！　聞いてなーい!!」
「もし、この事を誰か……指揮官に話しでもしたら……」
「指揮官ならむしろ高評価になりそうな…」
「はァ？」
「言いませんーーー!!」

だばだばと涙を流しながら必死に許しを請う小動物にちょっと嗜虐心をくすぐられるＡＲ―１５だったが、流石に性格が悪いと踏みとどまり、ぱっと指を開いて拘束を解いた。べちゃっと床に突っ伏した姿は猫というより、獣に怯えるウサギの方が相応しい気もする。

はぁ、とため息をついて本題を思い出したＡＲ―１５は話した腕を腰にあててウサギに話しかけた。

「聞きたいことが――」

「いやーーーーっ！　たすけてーーーーー！」

「……」

数秒前の脅かしてきた勢いは何処へ行ったのか、すっかり怯えた様子のＰ７はハンドガン特有の素早さで「ぐえっ」…躓いてこけながらも逃げ去っていった。

「はぁ、疲れた」

この一日ですっかりため息グセがついてしまったＡＲ―１５はつい愚痴をこぼしてしまうのだった。

指揮官からもらったリストがアテにならないと察したＡＲ―１５は手当たり次第に聞き込みを始めた。自分が干されている事などとっくに忘れて、道行く可能性のありそうな人形に「みんなが貰って喜ぶものって何？」と。

そして同じ言葉が返ってくるのである。休みか外出許可かカフェのフリーパス。妹（SOPII）がちゃんと常識を持っている事を喜びつつも、どれもピンと来るようなアイデアではなく、また延々と基地の中を練り歩く。

いったい何度諦めて現状を報告して終わろうと思ったことか。ＡＲ―１５が少し不貞腐れたように、他の女を励ますために利用されるなんて腹が立つし、おざなりにしたって罰は当たらないとも思った。が、色々と悩んだ末に投げるどころかお得意の執念を見せる。

形はどうであれ今の自分を指揮官はまだ必要としてくれている。戦術人形にあるまじき、命令違反をはたらいた自分を使ってくれるの

だ。その信頼には報いなければならない。というより、見捨てられるなんて考えるだけでもおぞましい。どんな些細なアピールでも欠かせないのだ。

と、決意を新たにしたところでお腹が空いた彼女はカフェに来ていた。ここには探し人の一人、スプリングフィールドが勤務している。あとお小遣い欲しさに手伝いをする人形がたまにいる。

「あら、いらっしゃい。珍しいですわね」

「げっ、ＡＲ―１５」

「こんにちは、スプリングフィールド。で、随分なリアクションじゃない、ＷＡ２０００」

二人とも、白いシャツにブラウンのエプロンとバンダナといった装いが良く似合っている。指揮官も非常に気に入っているらしく、ラインがくっきり映えるパンツスタイルは直々に土下座して頼んだとか。苦笑いしながら渋々といった様子で承諾する彼女の姿が目に浮かぶ。

日中はカフェ、日が暮れればバーに変わるここは基地職員達の憩いの場。人間の一般社員から性別年代問わず人気が高い。食堂より少々値が張るも、落ち着いた内装や音楽、美女が美味しい料理や酒を振舞う事から根強いファンが一定数いる。主にスプリングフィールドに。

因みにオフの指揮官から、ここに居る間は〝すーちゃん〟〝わーちゃん〟と愛を込めて呼ばれている。

「わーちゃん。ランチセット。ひ、と、つ」

「くっ……か、かしこまりました」

「うふふ」

悔しそうな表情でオーダーのメモをとるＷＡ２０００。別に私達の仲が悪いわけではない、ただ恥ずかしがっているだけだ。多少は副官の日が減った怨みも籠っているかもしれないけど、大部分はこうやって揶揄うからだろう。だって可愛い。

彼女は一〇〇式、ＵＭＰ４５、４１６に次ぐ四体目の誓約人形だ。人前で指輪を見ては周囲を悶絶させている人形その一。

「今日は指揮官と一緒ではないのですか？」

「ええ。ちょっと、野暮用を頼まれて」
「大丈夫かしら…」
「大丈夫よ、４５が暇そうにしてたから。ちょっかいかけに行ってるだろうし」
　この基地では副官が昼食を用意するのが決まりになっている。あの指揮官は放っておくとお腹が減ってないからとか、仕事が片付かないとか言い訳をしてお昼を抜くのだ。そして食堂が閉まった頃にお腹を空かせてコーヒーで誤魔化すか、非常食の賞味期限が切れないように回転させてると変な言い訳をし適当に済ませて一〇〇式に叱られるまでがテンプレである。
　昼食のオーダーはその日の気分。基本的には食堂で、カフェの営業日と気分が乗ればカフェ。稀に作ってくれと言われることも。
　あれだけ言われても治らないので、これも部下の務めと割り切って副官の業務になったのだ。
「そういえば小耳に挟んだのだけど」
「？」
「先日の大規模作戦――」
「おまたせ。ランチセットよ」
「あ、ああ。ありがとう」
　スプリングフィールドから聞き逃せないワードが飛び出てきたかと思えば、示し合わせたかのようにＷＡ２０００が注文していたランチセットを私の前にそっと提供してくれた。続きを聞かなければと思う反面、耳の痛い話になるかもしれないという怖気が混じって複雑な心境になる。
　が、すっかり忘れていた空腹感が存在を主張し始め、食欲に負けた私はそれを後回しにして眼前の昼餉に集中することにした。
　ランチセットは日替わりで、週に三回決まった曜日に納品される食料品でメニューがコロコロ変わる。カフェは指揮官の趣味とスプリングフィールドの道楽が行き過ぎた結果なので、その為にわざわざ食料品を融通してもらえるわけではないらしく、食堂でも使い切れないあまりを頂いて調理しているんだとか。

今日はＢＬＴホットサンドとスクランブルエッグ、チキンスープだ。
「……おいしい」
「えへへ」
感嘆が漏れてしまう程、文句のつけようがない上質な味。ＷＡ２０００は私の挙動に神経を尖らせていたようだけど、偽りない称賛に気を良くしてにへらとほほ笑んでいる。
ホットサンドは絶妙な焼き加減で表面のサクサクと中のふんわりが口いっぱいに広がる。それに反してスクランブルエッグは一切の焦げ目が見受けられず黄金の様に輝いて、卵本来の風味を味わえるのだ。食前で飲み干すには惜しいスープもまた格別。
最初、指揮官に手料理を作るのだと息巻いてダークマターを量産していたあのツンデレライフルと同一人物とは思えない成長ぶりに涙がこぼれそうになる。人形でも成長できるのだと、彼女は身をもって教えてくれた。
人間からすれば少なめだろうが、人形にとっては十分。食材の質とシェフの腕前あってこそなのだが。
「ごちそうさまでした」
そんなにがつがつと食べる方じゃないけれど、今日はぺろりと頂いてしまった。ちょっと恥ずかしい。
スプリングフィールドが空いた皿を下げて奥に引っ込み、ＷＡ２０００からサービスで貰ったコーヒーの香りを満喫していると、「そういえば」とつい先ほどきいた事のある言葉を聞かされた。
「あんた、聞き込みしてるんだって？　今朝から五回は聞かされたわよ。確か…みんなが貰って喜ぶもの、だっけ」
「え、ええ。ちょっと指揮官から頼まれて野暮用が」
「ふぅん。ま、深くは聞かないけどあんまり騒がしい事はゴメンだからね。あと、夜遅くなるのも却下だから」
「はいはい。昨日からはＷＡ２０００の日なんでしょ」
まったく、私の気も知らないで。こっちはその〝わたしの日〟が欲しくてこんなにも走り回っているというのに。私だって指揮官と同

じベッドで眠りたいわ。
　そしてこういう話が始まると、だいたいＷＡ２０００はのろけにしか聞こえない愚痴を漏らすか、盛大なのろけを始めるかに分かれる。そういうところ含めてこの話題が始まるとちょっとウンザリしてしまうのも、無理からぬ事だろうか。
　半ば諦めて相槌を打つだけの人形に変身しかけたところで、二人目の客が現れた。
「あ、ＡＲ―１５だ！」
「ＳＯＰⅡ？」
　ベルを鳴らして隣に腰掛けたのは末妹。ＡＲ―１５がするコーヒーを見て露骨に顔を顰めると「ホットミルク！」と元気よくオーダー。トリップして帰ってこないＷＡ２０００に代わってスプリングフィールドがキッチンへ引っ込んだ。
「聞いたよ、この後祝勝会するんだって？　どんなご飯が食べられるかなぁ…！」
「……は？」
　祝勝会のしの字にも覚えのないＡＲ―１５は訳が分からないといった様子で眉を顰めた。祝勝会まがいを企画しなければならないのだろうかとは頭の隅で考えていたが、実際にそれを誰かに放したりはしていない。ましてや今日この後だなんて。
「誰から聞いたわけ？」
「Ｐ７」
「ブチっ殺してやる」
「わー待った待った！」
　どうやら頭を粉砕されかけただけでは懲りてないらしい。いよいよその身に刻んでやらねばなるまい、と決意した
　ＡＲ―１５を身体を張ってＳＯＰＭＯＤⅡが止めにかかる。文字通り身体にしがみついて。機械部分がＡＲ―１５よりも多いＳＯＰＭＯＤⅡは当然ながら重たく、ＡＲ―１５は着席を余儀なくされた。
　全く成果が得られない中、なんとか気を持ちなおそうと訪れたカフェ。美味しいランチに舌鼓を打ってさぁやるかと気合を入れなお

そうとした完璧なタイミングを見計らった嫌がらせ、としか思えないほど。そのいやらしさっぷりはベテランの域だ。
虫の居所の悪いＡＲ―１５はぎろりとＳＯＰＭＯＤⅡを睨みつける。冷や汗をかきながらもＳＯＰＭＯＤⅡはにこにこと話し出した。
「一〇〇式の好きなものを朝聞いてきたけど、あれ絡みなんでしょ？
だったらのっかっちゃえばいいじゃん」
「……なんでよ」
「あるものを使って気にせずパーッとやっちゃいなよ。みんなが乗り気で楽しんでたら、流石の一〇〇式も文句は言えないでしょ？」
「……はぁ。うん、そう…そうね」
結局そうなるのか、いったい自分が走り回った数時間の苦労はなんだったのか。すっかり口癖となったため息をついて肩を落とす。誰に聞いても同じような答えしか返ってこない時点で、こうなることは既に確定事項だったかもしれない。その上、どこぞのガキに色々と持っていかれたとあっては、虚無感が果てしなく降り積もるばかりだ。
何がしたかったんだろうか、と朝からこの瞬間までの疲労が記憶とともにどっかと肩にのしかかった。
「……あ」
と、同時に天啓が下る。
『そんなに難しく考える必要はないわ。誰だって喜ぶものでも用意してみれば？』
『偶には里帰りでもさせてやれ』
きっかけとなったのは、頼りになりそうで頼りにならなかった人形の言葉。その二つと、ＳＯＰⅡとＰ７が運んできた祝勝会という場。それらが噛み合って弾かれた一つのアイデアは、今までの苦労を吹き飛ばすには十分すぎるほど、一〇〇式を縦に頷かせる自信があるものだった。
そうと決まれば準備しなければ。
「ＳＯＰⅡ。開始時間は？　場所は食堂でしょ？」
「うん。確か……１９時開始って言ってた」

「今が13時33分だから……よし」
善は急げ。カフェに備え付けてある内線の受話器を取ったＡＲ―15は指揮官室へと繋いだ。
「指揮官？　ちょっと用意してほしいものがあるの。……そう、朝の一〇〇式の件で」

渦中の一〇〇式はと言うと、副官の任を強制的に一ヶ月解かれて暇を持て余していた彼女は、久しぶりに射撃訓練所に籠りきっていた。先の大規模作戦でも専ら副官として働いていたため、長いこと半身である銃を握っておらず、鈍った腕を矯正すべく、あるいは溜まりに溜まったストレスを発散すべくひたすら引き金を引いている。
一〇〇式には特に代替の任務は与えられておらず、日ごろの感謝を込めてと休暇扱いになっている。だからこそ一週間ずっとかじりついていられた。そのおかげ（？）で一〇〇式へのサプライズが成功するわけだが……。
「うぅぅ～～～～～～っ!!」
憎しみの籠った評判通りの鬼の形相が、うめき声をあげながらひたすら模擬ターゲット（Ｖｅｒ指揮官）の眉間へゴム弾を撃ち込んでいる。頭の中では、指揮官への怒りと呆れが半分、副官として頷かなければならないやるせなさ半分が占めていた。
仕方がない、仕方がないことなのだ。日頃から何かと地雷を踏む旦那様だが、今回ばかりは悪くない。自分が子供のように駄々をこねているだけ。此度で六回目だが、未だに慣れない。
気丈に振舞ったり真面目であれと自らを律している鬼の副官も、余所行きの仮面を剥げばこんなものだ。
「……もうこんな時間」
セットしていたタイマーが鳴る。時刻は19時。特にやる事など

ないが、射撃訓練所の利用時間は限られている。口酸っぱく時間を厳守しろと言っている自分が破るわけにもいかないので、早々に片付けて鍵を閉めた。
　人形は汗をかかない。が、激しく動いた後は何となくシャワーを浴びたくなる……様になった。指揮官の影響だ。美容に興味は無いし汚れが落ちる感覚もイマイチだが、湯上りのさっぱり感は嫌いじゃない。
　シャワーを浴びて食事にしよう、その後は久しぶりに借りた漫画でも読んでみようか。
　就寝までの予定を埋めた一〇〇式は、そうと決まればと足早になる。
「あーー！　いたいた！」
「もー探したよ一〇〇式」
「スコーピオンとＰ７？」
　早速足を止めることになった。特別珍しい組み合わせではない、自分を探している点を除いては。
　走って駆け寄ってくる二人を睨みつけると、慌てて早歩きでサクサクと近づいてくる。最初からそうしなさい、とはもう言わない。
「ね、この後予定ある？」
「シャワー浴びてご飯だけど」
「じゃあ先にご飯ね！」
「ちょ、ちょっと」
　ぐいぐいと両方から袖を引っ張られては抵抗も出来ない。はっきり理由も口にしないが、いつものような悪戯を企んでいるわけでは無さそうなので、諦めて任せる事にした。ご飯、というくらいだし行先は食堂だろう。順番が入れ替わるだけだし。
　そこが近づくにつれて、なにやら騒がしくなってきた。この時間は賑わっているがこれはいくら何でも騒ぎすぎじゃないだろうか？
　……ドアを開けると、そこは宴会場だった。
「今日こそケリをつけようじゃねえか、Ｍ１６」
「ははっ、上等だＡＫ―４７！　先に潰れた方が負けだぞ？」

「そ、そろそろ止めた方が……」
「ほっときなさいＭ４」
「あっはっは！　これでアンタの連勝もストップよＳＶＤ！　フォーカード！」
「全く、典型的なフラグを立ててくれるとは…君は最高だなＷＡ２０００」
「ろ、ろいやるすとれーとふらっしゅ……」
「一枚脱ぎたまえよ」
「このぉ…」
「紅茶は無いんですか？」
「あるわけないでしょ……」
「全く仕方がありませんね。ではスコーンを」
「紅茶が無いのにスコーンもクッキーもあるか!!」
「ふぅ、これだけ一ヶ所に集まると流石に暑いわね」
「４１６は厚着しすぎよ、もう少し薄着でもいいんじゃない？」
「貴女は色々とはだけ過ぎよ、ＰＴＲＤ」
「どうでもいいけど私を挟まないでくれる？　鼻へし折るわよ？」
違った、混沌（カオス）だった。
のんべえ達は酒瓶を次々と傾けては空にして、ポーカーで連敗を刻んでいるであろうＷＡ２０００は指揮官が見ている前でＳＶＤにじわじわと脱がされて、ウェルロッドＭｋⅡが場違いにも紅茶を所望しては両断され、４５がいつもの様に乳ハラを受けてハイライトを失っている。各々が思い思いに宴を満喫していた。
仕事を終えたスコーピオンとＰ７は何が起きているのか聞く暇も無く、そろって紛れ込み見失った。
棒立ちで唖然とする一〇〇式は思い返す。
おかしい。昨日まで、もといお昼までは普通の食堂だった。特に〝呪祝勝会〟なんてボードは掛かっていなかった（というか横線で消すんじゃなくて新しく書き直せ）。
この数時間で何が起きたのか……問いたださなければ。
探し人は器用に箸で焼き魚をつついてはおちょこを傾け、隣に座る

ＡＲ―１５は徳利で酌をしていた。
「指揮官！」
「おお、やっと主役が来たか。ほれ、グラス」
「あ、ありがとうございます……じゃなくて！　説明を要求します」
「この間の大規模作戦も無事終了したしな。あれは久しぶりに苦しい戦いだったろ、危うく仲間を亡くすんじゃないかとヒヤヒヤした。景気付けと無事を祝ってのことさ」
「だったら呪の書き間違えは消してください。あと、それが理由なら出撃してない私が主役というのは間違いです」
「こらこら」
「あうっ」
　唐突なデコピンに危うく受け取ったグラスを溢しそうになる。赤くなっているであろう額を擦りながら指揮官を睨んだ。
　先の作戦では自分は前線に出ず終始副官として後方に籠りきりだった。指揮官の言う通り苦しい戦いだからこそ、労うのは自分ではない。それこそ、仲間の為に自爆すら厭わない覚悟を持ったＡＲ―１５のような人形が相応しいはず。
「お前が気づいて進言してくれなかったら俺はＡＲ―１５を失う所だった。まぁ、コイツが変なこと考えたのが悪いんだが」
「ぐっ…」
「それに、カリーナじゃあ分からない前線視点の意見は重宝したよ。お陰で兵站は今までの作戦で一番充実していた。苦しかったのは鉄血が上手だったことと、ＡＲ―１５の失踪だ」
「……ぐす」
「あの、流石にその辺りで止めてあげてください」
　にやにやと意地悪な笑みを浮かべながら言葉のナイフをぐさぐさと突き立てる指揮官に、流石の私もストップに入ってしまった。ＡＲ―１５が責められて当然と深く反省しているのは周知の事実なので問い詰めているわけではないが、彼女にとっては堪ったものではない。意外と気弱な彼女はちょっと虐めると反応が可愛いのでついやり過ぎてしまう気持ちはわかるけれども。

「さ、立ち話はもういいだろ。ＡＲ―１５、一〇〇式の分を」
「はい」
一秒で立ち直ったＡＲ―１５は厨房へと引っ込んでいった。今更何を言おうが全員が出来上がっているのでどうしようもない。資源のやりくりが苦しいのは指揮官もＡＲ―１５も承知の上で会を開いたのだろうし、今の自分は副官ではないからと納得させて、指揮官の対面に座った。
にこりと笑った指揮官は箸を進める。焼き魚を箸で一口サイズに分けて大根おろしを盛り醤油を垂らす、一連の動作をいつの間にか凝視しており、指揮官が苦笑する。ちょっと恥ずかしい。
……和食か。
……和食？
「お待たせ」
ＡＲ―１５が私の分を持ってきてくれた。盆にはつやつやと粒が立っているたきたてご飯、賽の目の豆腐とわかめの味噌汁、脂がのった丁度いい焼き加減のサバの塩焼き、小鉢にはほうれん草のお浸し、なんと漬物まで。
非の打ち所の無い、和食。
第三次世界大戦の折に故郷の日本は地図から姿を消した。正確にはちらほらと島が残っているのだが、核弾頭の撃ち合いで国土が削られ、海抜も上がり国と呼べるほどの領土と機能を失っている。生き残った人間が汚染から逃れた地区で細々と暮らしている程度で、経済もクソもない、秒読みの土地と化した。
それまでは世界的にも有名だった日本食も今では忘れ去られてしまっている。和食に欠かせない調味料である味噌や醤油など、製造する技術が失われたからだ。コーヒー豆やダイヤの宝石よりも希少価値があると言っても過言ではない。
つまり和食は地球から姿を消した。筈なのに。
感動のあまり言葉すら出てこない。だが身体は欲しているのがよくわかる。合掌し、いただきますと唱え、左手で茶碗を持ち箸で白米を口へ運ぶ。味噌汁を啜る。漬物を食む。

「美味しい？」
「……はいっ」
　もう二度と味わう事は無いだろうと思っていた懐かしい味に、涙が止まらなかった。
「良かった。泣くほど喜んでもらえるなんて思ってなかったけど」
「これはＡＲ―１５が？」
「食材は指揮官が。後は私とスプリングフィールドで。ほら、元は民間用だから古いレシピもインストールしてあるのよ。こう見えてＡＲ小隊のシェフなんだから」
「……やりますねぇ」
　得意げなＡＲ―１５とは珍しい。だが何であれ感謝しかない。しかし、それもつかの間で彼女は申し訳なさそうにしゅんと縮こまってしまう。
「えっと……」
「この間の独断専行を誤りたいんだとさ。一番怒ったの、お前だったろ。それからまともに口もきいてないし」
　ああ、そのことかと合点がいく。
　確かそうだった。他の人形からも少なからず不満が上がっていたらしいが、それらを代表したつもりで激しく叱責した。仲間の事となると人一倍熱くなる……見境が無くなるという表現が正しいか。彼女なりの仲間を思った行動だったのだろうけど、それらを頭から全否定して正論でねじ伏せた。あまりにも言い過ぎて指揮官から窘められるぐらいには強く言い過ぎたと思う。
　内心では嬉しかったし、羨ましかった。躊躇なく行動に移せた勇気を讃えたい。しかしそれとこれは別。結果的により部隊を危険に晒したし、誰一人掛ける事無く終えられたのは偶然で、ただの結果に過ぎないからだ。
　それで手打ちにしたつもりだったけど、訓練所に籠りっきりで顔を合わせてなかったからそう思われていたのだろうか？　だとしたら、申し訳ない。
「言いたいことは言いました。あれで全部ですし、あれで終いのつも

りです。あと勘違いしているようですが、みんなＡＲ―１５の行動には称賛を送っています。それは素直に受け取ってください」
「だ、そうだぞ」
「でも……」
「ＡＲ―１５。もう一回お説教されたい？」
「け、結構よ」
「よろしい。だって冷めてしまうし」
若干引き攣った顔だが、これでこの話は終わりだと踏ん切りをつけられたようで何より。次に同じことをしなければそれでいいのだ。頭のいい彼女なら心配しなくても良い。
どうやら私を待っていたらしく、自分の分を取りに行って戻ってきたＡＲ―１５は私を真似ていただきますと合掌。慣れない手つきで自らが用意した和食に舌鼓を打った。
彼女のサバが骨だけになった頃、他意は無かったんだろうけどＡＲ―１５は爆弾を投下した。デストロイヤー級のどでかい爆弾を。「落ち込んでたって聞いたのだけど、どうして？」と。
びくっと肩を震わせた指揮官を横目に、にやりと口角が吊り上がる。いつも迷惑をかけられてるのだ、偶には仕返しをしたって良いだろう。いや、いい筈。罰は当たらない。
「だって、指揮官が七体目の誓約人形を選んだって言うから……」
がやがやと騒がしかった会場がピタリと鎮まり、ＡＲ―１５が放心するあまり右手の箸をこつんと落とす。その音で一斉に一部の人形が弾かれるように指揮官の元へ押しかけた。Ｍ１６命名、指揮官大好きクラブの過激派だ。最も近い位置にいたＡＲ―１５はサブマシンガン顔負けの速度で机を飛び越えて指揮官を押し倒してマウントを取り、続々と他の人形も押し寄せる。
確実に言えるのは、我らが指揮官がハイライトを失った瞳と涎で覆い尽くされている事だろう。

恒例、と表現していいのか悩むところだが、現状の誓約人形六体は揃えたようにこう口にする。
「昨夜は激しかった」
と。
指揮官が誓約を宣言したその夜、なんと宿舎の個室を訪れてその場で誓約を交わすらしい。マニュアルではなくそれが指揮官のやり方なのだ。よく聞くのは人間の結婚式のように、ドレスを着て新婦の前で愛を誓うというあの場面なのだが……。
そして結婚初夜と言えば……まぁ分かるだろう。
なので、私（AR-15）含む誓約を積極的に望んでいる人形は目いっぱいおめかしをして、今か今かと来るかどうかも分からない指揮官を待つのだ。
例に漏れず、私もその一人なので今回も頑張った。古参とはよく言ったものＡＲ小隊は厳密には司令部所属。特に命令が無ければこの基地で一戦術人形として作戦に組み込まれるが、留守にすることもしばしば。同時期に基地へやってきた人形達と比べて指揮官と過ごした時間は圧倒的に短い。ＷＡ２０００がいい例か。
最も新しい誓約は特殊な子だったので、全体へ昼の内から公表していた。今晩の結婚初夜待ちは久しぶりである。何度も鏡を見てはおかしなところが無いかチェックし、部屋のレイアウトを見直すのも何度目か。Ｍ４以外の妹たちに背中を押されるのも、今日で終いにしたい。
時計の針は２２時を指す。消灯だ。
先人からもらったアドバイス通り、アロマを焚いてその時を待つ。指揮官が好きな香りらしい。一〇〇式と４５が情報源だ。４５はちょっと怪しいところがあるが、指揮官絡みになると嘘はつかないし一〇〇式の口添えもある。

アロマに身を包まれながら、その時をひたすら待った。
なぜ二人がそうアドバイスしたのかも知らずに。

「指揮官、ＡＲ―１５はぐっすり眠っています」
「おっけ」
「行ってらっしゃい。……毎回思うけど、浮気の背中を押される気持ちってどうなの？」
「浮気ってのは愛情がそっくりそのまま移る事だ。でも俺は全員に愛情を注いでいるので浮気ではない。ただの重婚だ。そもそも本社が誓約証を販売している時点で重婚を推奨しているからな？　つまり俺はグリフィンにとって模範的な指揮官ってことだ。もっと旦那を誇り思いたまえよ」
「はいはい。蔑ろにせず愛してくれるならそれでいいわ」
「ですね」
「それより、彼女大丈夫なんでしょうね？　指揮官の秘密、打ち明けるに足るのかしら？」
「４５は不安か？」
「ＡＲ小隊は司令部直轄だもの。もしバレてしまったら、怖いわ」
「それこそ大丈夫さ。なぁ、一〇〇式」
「はい」